

機  
関  
誌

# パルチザン

臨時特別号

地域斗争を全面展開し  
帝大解体の場とせよ!

根拠地-遊撃拠点を結合し  
地区ソビエト統一戦線へ!!

特  
集

「大長征」報告

— 六月斗争中間総括として

淡路斗争委員会

1970・6・20

# 目次

大長征総括

12日全学学生大会勝利 → 御堂筋デモ

13日 州本(池路島)集会 → デモ

14日 東京集会

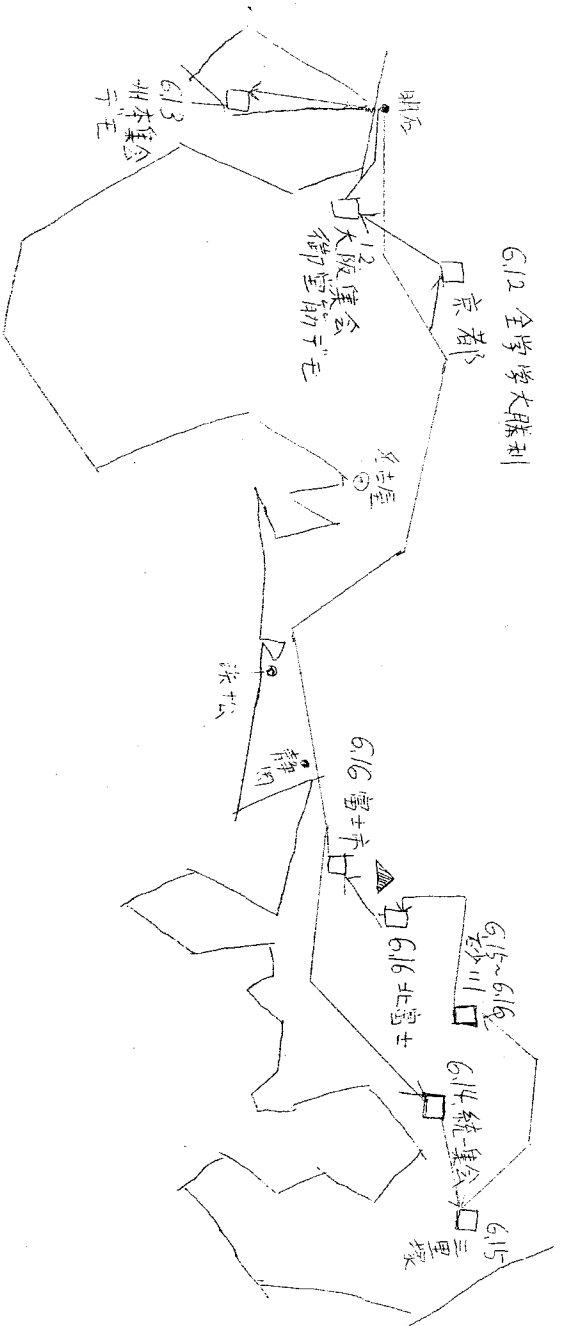
15日 三里塚

16日 砂川反叛 野塚での討論集会  
" 青年の家に於る宮岡氏との討論

富士市 甲田氏との討論

※ 北富士演習場は 忍草母の会の都合により討論集会がこきなされた。

# 大長征図 [1970 6.12 - 6.17]



# 大長征総括

## 一大長征の目的

一九七〇年六月という時をむかえて昨年十月より活動が続けていた、淡路斗争委員会とは、いかなる形でこの年安保を闘うのかと云う問題をつきつけられた。淡斗委と云うものは六〇年代の新左翼運動、即ち一点突破的中央権力斗争と批判し、又教育・研究体制の帝国主義的再編に対して鋭い闘いをいどんだ全共闘運動の学国内主義的な限界を止揚すべく成立したものである。

たからこの六月という期間に単に中兵でカンパニア大集会を闘くとか無展望なせつめ、武力斗争により六月安保を闘うとか、大学の機能をストライキによってストップさせればよいとかいうような考え方は、当

然肯定することはできないのであった。

淡斗委は、そのようなカンパニア大集会とか折檻性の強い武力斗争に対するアンチテーゼとして六二二〜七〇七にかけてのいわゆる大長征を提起した。

その目的の才一点としてそして最も主要なものとして、現在日本各地で斗われている地域斗争とりわけ基地演習地斗争を斗われている農民を中心とした反軍事基地斗争又資本主義の矛盾の八ヶ岳である郊外の都市公害に対する公害斗争を闘うこと、農民、労働者、市民との連帯をかうこと、ということである。我々は七〇年代の階級斗争というものが地域斗争↓地域

党反乱という形で斗われなければその勝利の展望が如何のたと云う観点に立って淡路島の斗争を斗っている。しかし現時点に於てその地域斗争を斗う部分の構構、ている最大の弱点として地域孤立性というものがある。我々は備としてその分断を克服して在知の地域斗争を結合せしめ拡大させなければならぬのだ。それこそが、真の安全保障であるという考えをもつてこの大長征を行なう。

オニ点として八月に関西新四府空港が、淡路島に内定しようとしている。このような緊迫した時期に我々が如何にしてこの権力の攻撃を粉砕すれば良いかについて、戦術等々いろいろ学ばねばならないが、各地域斗争を闘っている部分にあるはずであるという見通しに立って、それを学ばねばならない。この大長征を行なうのである。それに各地域斗争を直接担っている部分の人を含めて

外部から来た人面習ち学生、研究者がその斗争に於てどのような役割を果しどのような限界性があるのかを聞く事か、必要であった。そのような事を知らねば、斗争の限り我々の地域斗争は成功は、おぼつかないのである。

オニ点として今までの淡路島には、個人主義的傾向が強すぎてもうそれは無責任な活動や他人におぼさる形での活動が多かった。これに打ちこむ大長征により開放的又共同体意識を作り出すことのできるのでは無いかという事があった。つまり我々に欠けていた組織論の形成に何らかのプラスを手えらるのではないかと、いうまぐろみがあった。

オニ点として我々の斗争が淡路島斗争というものが学問から切り離された存在としてあるのではなく、明確に学問地域の結合を目的意識的に追求して

いらものである。従って学園斗争を担っている部分と我々との結合を、大長征に彼等が参加する事によってなそうとした。

このように今度の長征の目的は七〇年代階級斗争を如何に闘うかというマクロ的視点としてのオニ点、八月淡路内定に對し如何に闘うかというミクロ的のものとしてのオニ点、淡路の内部を如何に強くしていくかという組織内の内題としてのオニ点、及び他の全共斗大衆との結合という斗争主体形成についてのオニ点、の全ての突破口として、今度の大長征があったというふうにまとめることができる。

## 二、六 長征總括

先にあげた四点の目的に對しこの大長征の終った現時点における總括を行ないたいと思う。

まずオニ点の分断を克服した斗いを余儀なくされている現在の地域斗争の結

合という事については我々の意図したもの

よりも大きな成果があったという事を確認せねばならない。というのは六・二〇における京大のシンポジウムに各地で地域斗争を担っている人に参加してもらった事ができた事を見ても地域斗争の結合を目的意識的に追求した大長征の意義がある。又、このシンポジウムというものは七〇年代階級斗争にとつてきわめて重要な位置をしめるものである。というのはこのシンポジウムが学園斗争と地域斗争という七〇年代の最も大きな斗争の結合の萌芽形態であると考えられるからである。又この事と関連し、地域斗争を担っている部分で一つの機関誌を作るという事が具体化したという事も非常に大きな事と云わなければならないだろう。地域斗争の結合といっても単に精神的、理念的結合では何の力にもなり得ない。我々は機関誌を持つという事がただ単に楯宣に役立つという事よりも理論展開、情況報告

等々で具体的な地域斗争向の結合もはか  
るし々の拡大へ算的にも量的にもはか  
れると考へてゐる。そのような意味でこの  
機軸製作成が具体化したという事を大きく  
評価せねばならないと考へる。

このように才一点の目的はほぼ達せられ  
たし、今後の明るい見通しをたてる事が  
できた事を確認したいと思ふ。

才二点の八月に釜路島新国際空港内定と  
いう権力側の攻勢に対し我々は今何をなす  
べきか、という事について、とりわけ外部か  
ら斗争を担ふとする部隊がとるべき行動  
は何かという問題については種々の戦術、  
戦略を考へたと思ふ。まず、現在砂川で行  
なされていく市長リコール運動がある。こ  
れは砂川十五年の斗争において一志立川基  
地孤張は妨げたもののその現在持っている  
軍需基地としての機能は依然大きいとい  
う認識を立てて砂川斗争を斗った人々によ

としてあるがその限界性を見きよめて利用  
しないと非常な危険があるといふ事が確認  
された。即ち砂川斗争の才二期に宮崎町長  
の存在が大きな斗争の支えとしてあつたが  
彼が死ぬといふ事態に於てはなだれをうって  
戦線が崩壊した。又地方自治体自身が丸抱  
え的に反対するのでは決して力になり得な  
い事は釜路においても証明されてゐる。し  
かし現時点においては住民が一定程度幻想  
を地方自治体にもつてゐるためやはり利用  
せねばならない。学生、研究者の地域斗争  
での役割については突つこんだ話し合いが  
時間の制約等々もあり、一般的に学生が良  
くや、まくれたとか、学生が屈たから斗争  
がうまくいったといふような話しができな  
かつたのは残念な事である。

才三点としての釜斗の組織問題を解決し  
ようといふもくろみはほとんど盲く行な  
つたといふやうを得ない。つまり釜路の

て現在一軒一軒をしながら署を襲めて  
いるのである。このような行動が超保守と  
呼ばれてゐる立川市に於ても流石化を起し  
てゐるといふ事に注目せねばならないと考  
へる。

又、富士市に於ける公営斗争で最も斗争  
的に斗つてゐるのは沿岸漁民であるといふ  
事も我々に大きな示唆を与へてくれた。因  
土総丹編に対して農民より以上の被害を被  
る漁民の戦闘性といふものも今以上に大き  
く評価せねばならない。

又、この大長征の向最も痛切に感じらる  
は向としても拠点の必要な事であつた。こ  
れは勿論物理的距離的拠点といふ意味も  
あるが、極少数部分でも良いから人的な拠  
点といふ事も含んでゐる。斗争の中心部分  
が形成されれば斗争といふものは充分や  
つていけるといふ事に全ての地域で等しく指  
摘されたところであらう。

自治体利用についてはなかなか有効な手段

アジト生活の延長上にしかこの大長征が他  
置けられなかつた。この原因として最も  
大きなものとして期間の短かさといふもの  
があると思ふ。余りに短兵急にこのように  
向事を解決しようとしても不可能であらう。  
又我々の内に組織論の相槌が遅れてゐると  
いふ事も大きな問題である。我々が全女斗  
の再編といふ事を主張するために組織論  
の相槌を急がねばならない。

才四点の学園斗争と地域斗争の結合とい  
ふ意味でこの長征への参加を募つた。参加  
者はA自から2名、Dスト実から2名、S  
女斗から1名といふ事であつたが、多くの  
学友諸君にそれなりの新鮮な衝撃を与えた  
事は否定できない。又、釜斗を以外の参加  
者の諸君が積極的に行動し発言した事を高  
く評価しなげればならないし、彼等が地域  
斗争と学園斗争を結びつたことが確認  
できたのである。

このように大長征に於て、党内部の種々の向背点が露呈された。しかし今後の斗争の明々い見通しが立った事や、全国的な連帯が勝ちとられた事は高く評価されるべきであらう。我々はこの大長征の成果をふまえて断固として今後の斗争を闘い抜く決意を全ての斗争友諸君に表明する。そしてより多くの学生友の斗争への参加を訴えてこの総括を終りたい。

# 6・12 就全学スト決御堂筋へ

京大6月長期政治ストが各学部(C.S.L.C.M.T.C)で勝ちとられる中で、6・12全学学生大は、日共民青の日和見主義を大衆的に粉碎し、全共闘大衆の再度の圧倒的な噴出をもって、圧倒的に勝利した。そして二千名の隊列で学内デモを繰りひろげ、御堂筋斗争に55名結集し、奥西に於けるカンパニア斗争を貫徹した。我々は、このような形での全共闘大衆

（6・15 砂川反成聖塚より続く）

我々はこの連帯の中で70年代における政治を、地域における全人民的政治の展開として確認し、そういって地域斗争を全国的に結合し、今更には至極交流と理論展開の場として確立し、地域斗争を刊行することを確認した。

の決起を総括の重要な視点としなければならぬ。新左翼のカンパニア斗争というものが、目的意識は様々である各層が広範に結集すること、大衆Mの一つのパネになつていゝことを確認できる。しかし大衆の決起が結束しなからず全学スト突が方金政治を提起できなかつたことを自己批判的に総括せねばならぬ。我々は全共闘大衆の広範な存在を確認しつつ、地域斗争の質を提起する必要がある。

# 6・13 淡路島・洲本

## 〔6・13 安保粉碎・空港建設阻止 淡路総決起集会〕

全人民的な政治すなわちあらゆる諸階層をまきこんだ地域斗争を展開するという目的意識を掲げて空港予定地より数十Kはなれた淡路の中心地である洲本で初めての政治集会を行つた。状況判断としては、4月より県当局が本格的に山林農地買上げの話に入り始め、しかもかなりの

広範囲高額の保償が提示されており、農村部に対するオルグの方針を単に保償金にあてにならぬとか公害の話から軍事空港安保という所へ持つていかぬと闘い得ないということ、政治的な訴えかけを必要としていたことあるいは、政治的な潮流の登

場が要請されていたこと、そしてそれを社共批評の後退していく中で6月安保斗争として我々自身の手で登場させること、以上のようない観点を挙げて行なわれた。

一週同前に明石反成東神戸反成淡路反成淡路の四者で打合わせを行つた洲本において、ステッカービラまきの精進活動に入る。特に洲本における労働者（鐘紡交通、島原等）に対する働きかけ、空港周辺の拠点としていゝる所として全島六枚六千人の高枚性に対してそれら一般市民のような月に対して訴えかけることにする。

この精進活動の第一日目洲本でステッカーを電柱に付せている二人が洲本警察署に下り、不当に逮捕される。各紙は二百に、その



戦後の政治情勢を考察するに際しては、

更に、我々の来た、京大後援に於ても、  
、皇族派の勢力を散らさず、夕張化を勝ち  
取っている。その結果は、皆都畿天起カ  
ンパニアに於ても、皇族派の力がある。  
代々木公団での、不入存隊の統一行動が  
勝ち取られた。ということ、京大に  
於ける皇族派の勢力を統一しての統一戦線が  
、皇族派、皇族派の勢力を統一しての統一戦線が  
たものに過ぎない。だからである。

我々が、この間、地域闘争を通じての全  
共斗本派の闘争を提起して来たにも拘らず  
、それを成し得なかったのは、我々自身の  
急進(代々木公団への入席)抜きにして諸  
れ存以上、身回の集結に於ける我々自身  
の主体的行動を、吾輩の組織的団結と  
して、徹底的な絶招をやる必要がある。至  
固の政治的保護する組織を構築する。

我々は、

我々は、地域闘争の全面的な高まりの中  
で、再度、戦線の分散、拡大を提起し、目  
的の地域闘争存続の広範な結果を伴う  
と伴に、反帝、反中露闘争に於ける統一  
戦線を打ち立てる必要がある。そして  
、現在の八家野台を共闘を、地域闘争を具  
体的に展開する中で、再編を勝ち取る必要  
がある。

(文責 森)

# 6.15 禁・三里塚

一 禁、三里塚連合委員長 戸村一作氏 事務局長 北原誠治氏との討論

6月14日の東京における反帝隊の八示モ  
ニストレーションを主催した我々淡々と中  
心とするキャラ、藤は、翌15日朝三里塚  
へ向った。現地に行くと討論を一般的な情  
報交換の場に移して、個別闘争のいかえ  
ている向嶺の止揚を求め、更に個別  
地獄闘争の具体的な組織への発展を迫  
求する一歩とすべく、我々は往路のバス  
の中で農民の反空港斗争という側面を共有  
する三里塚においてどの様な闘争が闘争を  
になつていくのか、支援部隊としての公戦  
集団がいかに斗争にかかわっているのか、  
いかなる質で農民との連帯を打ち取ってい  
るのか、どの様な工作が可能なのか等々一  
連の討論の視点を確認した。しかしながら

時間的制約から反対同盟の戸村委員長及び

此原誠治氏の話を聞くことにかた  
よってしまつた。斗争の現局面、復  
得した数、普遍的闘争への動向  
の過程、その向の農民の自己発展上  
自己形勢の内部であった。三里塚  
路島においての斗争の発展を待つた  
階級闘争を提議した。そして我々  
にヒッて提議する意思を明らかにして  
くれる。三里塚の闘争は、

三里塚の闘争は、農民の自己発展上  
その現局面に於ける農民の自己発展上  
れていよう。我々も我々の自己発展上  
一歩の二歩を踏んで我々の自己発展上  
戦い、我々の自己発展上、我々の自己  
統率に我々が我々の自己発展上  
捨得して我々が我々の自己発展上



争、少年行動隊による対機動隊闘力斗争、  
 50日向坐り込み斗争等多彩な斗争を展開し  
 ている。又救援、斗争資金の創出の爲の土  
 方、同盟休校、そして農氏学校等々、ユニ  
 ミューンの萌芽が見い出される。斗争が階  
 級的視点を内実化して行く過程の中、フル  
 シヨア教育者、形武主義教育者のみから  
 教育を自らの手に奪還して行く、即ち、斗  
 争の領域を全ゆる方面へ全面的に展開する  
 事が斗争の拡大と聚化の爲に要求されてい  
 る事を示していると言えよう。

三聖塚の農氏は、斗争の深化の過程で権  
 カ打倒を語る。そして、今日の商品と反対同  
 盟から離れば一人が公団と斗わなればなら  
 ない。同盟と共にいるのが一番正しいだ  
 けでなく安心だ固と意識されていく。それ  
 を保障した目的として戸村、北原三氏は農  
 民の土地に打する愛着が、斗争経路の中で  
 国家権力と鋭く対立した事、農氏の中にあ

る革命性が打ちこみ斗争の中で引き出され  
 た事、労働者、学生の革命的な支援と連帯  
 を求められた。農民が部族的、そして斗争  
 の過程で自らを組織するべくくり抜ける中  
 で単に土地を守るだけではいられず、更に農村  
 社会をどうにかする必要があるの如く見え  
 来、土地を人間的に利用する為の「土地争  
 闘斗争」へより前進する事が必要だと、農氏  
 北原三斗争は、農民を中心、労働者、学生、農民  
 を堅持した政治的斗争として展開されて  
 いる。三聖塚の斗争は、自らの言う「階級の  
 学校」として自らを組織するに、政治的の合  
 法と自給する闘争、そして斗争を合弁し、  
 掃人行動隊の中心として、農民に「学生が必  
 しい程に労働者、学生を組織し、農と労働者  
 空壳予定目的、そして、斗争を合弁し、  
 のに對し、農民は、労働者、学生、農民  
 斗争し、そこへ斗争を統一する。国家権力  
 分産の味方である」との主張を高く掲げ

(州本業会 報告、後に続く)

# 6.15 砂川 反戦 塹壕

へ 反戦 塹壕 行動隊 共斗会 討と

砂川における基地斗争は、労働者市民連  
 帯のもとに斗われた。そして戦後の基地斗  
 争、農民斗争の最を端を切って展開された。  
 しかし砂川における斗争主体としての農  
 民(反対同盟)の斗争についてみるならば、  
 終戦、戦時生産権防衛斗争を端として展開  
 されて来たと言えよう。

それは三聖塚等の農民においてと同様  
 うに斗争の過程で、資本制社会に於ては自  
 らのものとして承認されているはずの私自  
 産産物も農地さえも国家的事業体の前には強  
 制的に没収されてしまふのだということも  
 知り、本業生、労働者との出逢いの中で自  
 らの意シキ領域を拡大していった。そこで  
 そう言った中で農業生産用地としての土地

収証を近郊空地としての地価が完全に起  
 こるといった、農民の「土地を守る」斗争  
 の動機をも東り越え、米作の「土」も「土」も  
 といった構図の中で、五川基地施設阻止斗  
 争と擁護斗争から、反戦・反基地斗争へと発  
 展して行った。

しかしながら、同年4月「滑走路延長計  
 画中止閣議決定」、10月3日の「米軍飛行  
 機中止延期」に至る砂川農民斗争は、6  
 年6月1日の勝利集会(資料)「砂川反戦  
 塹壕の歩み」参照)において、五川中心に  
 ける反対同盟の激正といった形が表れた  
 如くに「私自財産権防衛斗争」としての根  
 拠を示した。

我々はこの戦争社会を「反戦塹壕」

境の限界と、地下の掘りこごとみなり  
ればなるなり。

即ち、始め自治体斗争として、砂川町と  
は自治体斗争として展開された砂川斗争  
は、62年自治町長の死後、63年砂川町・立  
川町合併という過程で「基地の町」立川  
といふた。住民の複層的利害関係の中に収  
りこまれるといふた。越境策において、ただ  
単にカンパニオ斗争を展開するのみで、基  
地周辺の全住民の諸階層を巻き込んだ全面  
的な政治を展開し得るか、たまたま指達する  
のみならず。

このいふた限界性の向背は我々が全共斗  
運動の発起の中から提起した「地城斗争論  
」における、60年代型市民民主的政治の限  
界として指達できるし、それに対して我々  
は70年代における政治を地城における全人  
民的政治の展開として提起してきた。  
かく、現在砂川においてこそ『砂川反戦

# 6・16 砂川

へ砂川町 宮岡 政雄 氏に聞く

砂川町における立川基地拡張は、一九五五年五  
月、当時の調達庁が通告して来たことから始  
められた。

これに対して、拡張地域における住民・農  
民は、「土地を守るために立ち上がったの  
だった。三里塚斗争の初期と同様に。

当時九十戸余りの住民中、農家は三十戸、  
専業農家は半数、残りは基地労働者十数戸を  
含む、ツトメ人であった。

農民・住民は、「もしよせん政府にお上の決  
めたことには負ける」という毅然としたあき  
らめを宣明して、個人別による恫喝・懐柔、  
②による直接暴力と非暴力協力的に十五年間闘  
抜いている。

この再統性は、経済的に展望のある、経営  
のうまい人を中心と、比較的小規模の農家、

皇後行動隊共斗会設立の諸君等の実践的戦  
術の中からも、立川に於ける反対同盟の政治  
的孤立化傾向を免れざるものとして、70年  
代に向けた全人民的政治が展開されている。  
即ち、「立川基地平和利用市民会設立、  
「自衛隊移管阻止行動委員会」による、反軍  
反基地大衆の獲得、反戦自衛隊移管阻止、  
立川市長リコール運動、自衛隊移管阻止、  
基地業ム再興反対、基地撤去斗争、反軍系  
別決定運動といった聖び取り組み、反戦  
反基地の「砂川斗争」から、反軍・反基地  
斗争の「立川斗争」へと全面展開されよう  
とされている。

このいふた地城斗争・基地斗争・農民斗  
争としての砂川斗争と、我々の全共斗運動  
の実践的発起としての濠路斗争の出逢い  
として、今回大長征の砂川連帯委員会が発  
られた。(大長征総局総経理ヤジグへ聞く)

あるいは、反対だけして自分ら運動しない  
という人がからまる等様な反の総合した力に  
よると言える。経営のしつかりした人にく  
ついていけば、たとえ務転するにしても安心  
だと言ふ意識は、この長い斗争の向にも、充  
分変革されたとは言えない。

こうした総合力は、しかし、農民・住民の  
向だけで獲得しえたものではなく、個人主義  
的な、視野の狭さは外部の応援(三夕摩地区  
労・総評、全学連)に支えられ、克服されて  
いった。

そして、一九六九年二月二日からの反戦整  
頓の斗争は、四月十九日の拡張中止協定決定  
後も、ノンセクト・反戦の有志によって尚  
れ、昨年十二月以降一機も立川飛行基地から  
は、離着陸していけない状況である。こうした



「成業」は、充分に露骨に取られている。とくに、説明文を指導する自らが無き感えられたが故に、この前叙決定にも、反戦態度にも、く、現在暴露されている自民党市長リコール運動への市長は公然と、自民隊の立川基地攻撃を再々を表明している。にも対応できないというのだ。

宮岡氏の「七十年代には、この斗争を市民が露骨にする、そのした市民の政治感覚を感ぜざることを、あらゆる党派、自民党から要請までを相手にして、みんもの刀でやりたい。しど斗いの抱負をキ然とした口調で静かに述べた。

地域斗争については、一つの部落を徹底した反対する熱意に形成し、国土開発における希望、空港に付随する公害の問題を抜きにしてもら、又、農氏に住民は、「自治会を動かさない」という意識と、「切けは食えぬ」と思っている、農氏に意識できないでいる、市民が持っているという意識を一般市民

反と共有することしを獲得し、反軍、反基地、基地撤去斗争としても、斗いつづけるのでなければならぬ。

その際も慎重に事を運び、次の場面を考慮して斗わなければ敗北するとして、三里塚斗争での今年二月一九日の強制測量における、座り込みの意義に耐えることの意味と、六月十二日の収用者の審理における細かな戦術についての話を聞いた。

「『決戦』というような一発勝負では勝てない。毎日、毎日が決戦です」という氏の十五年斗いを聞き、さらに反軍斗争への決意はなみなみならぬものがあつた。

砂川・三里塚・共闘士忍辱斗争と連帯して、炭路斗争を押し拓くぞう。  
炭路は脈一厘も空港阻止。  
全ての斗争を反軍は、炭路斗争まで結果として斗おう。

# 6・16 富士市

八幡田 寿 彦 氏

富士市は公害のデパートと呼ばれているように、騒音・大気汚染・水質汚濁・悪臭等々の公害がある。我々も、夜富士市へ入ったが、鼻をつく悪臭、夜目にも明らか河の汚染、大昭和からはき出される煙や騒音のひどさに驚いた。我々は富士市公害対策市民協議会議長甲田寿彦氏と一時面会した。以下は、その内容を主にまとめたものである。

## ① 公害斗争の現状

富士市は、その豊富で富士山の地下水を利用した製紙業が工業的に発展したが、その排水のため、河川汚染と山最初の被害を受ける農民が、先づ斗争を開始後に海水汚染に及ぶ漁民の斗争が始まった。そして市民・漁民の一部の農民漁民によって市民

協が結成された。漁民の斗争エネルギーは、大きなものがある。そのあらわれとしては、昨3月28日の市議会への乱入があげられる。しかし、その運動に対する警察の介入と漁民の運動は低迷し孤立している。そのような孤立を克服するため、漁民をつれていっめん（本俣）へ行く計画も予定されている。海水の汚染が、現在では駿河湾一帯に広がっているため、東駿河湾の漁民・市民の連合による協議会もできていく。

しかしそのような運動がある一方、その運動が富士市に於ける一大独占資本大昭和に対する依頼状訴という形をとって自らの権利主張という面が強い。それは何よりも、その域下町ともいえる大昭和の経済・政治支配（経済的に直接関係する者だけでなくサービスマン等の間接的関係に対する影響も大きく、又、権力の意志は権威と見なす

いる町内会を、利用した政治的な支配体制も作っている。が原因であるが、戦後の民主主義が定着しているとはいえず、多くのもの言わぬ市民、存在している為でもある。又、大昭和製紙の組は、公害斗争に対しては、全く対応ができていない。一方、板力の住民運動に對する対応は巧妙になり、アメとムチの両方、運動を押しようとしている。即ち企業との間に住民政策的に公害協定という名の橋を架け、他方では住民の再建申請に對して、④、配当するという相違をくり出してゐる。

### ② 斗争の問題と今後の課題

①でも述べたように、一般の幻想としてあった戦後民主主義が、斗争の過程で明らかになり、たように、土を分ける支配者層へ富士市の場合は大昭和に付する(反)の間に「ものいふぬ布」としてしや登場できない住民を公害斗争を通じて市民の中から夏の民主主義とやら、にして芽ばえ

させるかが今後の課題として課せられていゝる。それは地方自治に對しても同様である。地方自治をどのようにして住民の手にとりもどすかが向題である。具體的には、現在一部の面で斗わぬに闘争を如何にして全市民的なものにして、住民のエネルギーを噴出させるかということである。そのためには、その土地の史的构造に規定されていることを自覚し、土地の住民が主体的に密度の高い闘いを組織し、住んでゐる人間一人一人の胸を、叩いてゆくような「わいもうな闘い」を行う必要がある。そのような闘いの中で住民が自分自身で暴力の正統性は、きりと見破り、自らの往で感得ることが重要である。そのような市民運動の中から七十年代斗争の展望が生れ出てくるだろう。労働戦線についても現在は、その企業に對する忠誠心から自らの住民としての立場、あるいは労働者階級としての意識を生く、又如させている公害発生企業の

労働者に對する工作が重要となつてゐる。

労働者が企業内において、公害の被害者であり、企業外の住民としては公害の被害者であるという矛盾へそれは資本主義を自らの労働で文えつつその中で搾取されていくという状況にも通じる。をはつきりと自覚させ、その企業内及外を準備させることである。それは、たしかに困難な作業ではあるが、それを貫徹しなげ限り公害斗争の決定的勝利はありえないことを確認すべきだろう。

### ③ 市民と研究者の連帯

富士市に於ては、現実には宇井徳氏を中心とする東大都市工の学生が大昭和の廃水を24時間調査を行つてゐる。心情的には連帯交流が行なわれている。しかしあくまで斗いの根拠、主体は住民である。研究者としては「理論的根拠を身えこ」住民の運動の弱さ、脆さを補強する役目である。それは

住民の斗争の主体を確立するものびなうればならない。

地域住民と、そこに任んではない研究者が共闘する場合、一致した路線が必要である。それが明確でない場合、単に2、3度現地に行つたからといって容易に共闘を口にすることは、幻想の共闘に終つてしまふ。研究者の限度、住民の限度を互いに認め合うことが重要である。

### (6) 3 洲 本集會から続く

#### 一 路 東京へ向う。

先づ、茨路において初めて新たな政治潮流が公然と登場したこと、そしてこれが、空港阻止に向けての力強い一歩として位置づけられることが確認された。しかし商店街におけるデモ隊に對する態度「ミッター」を降して我々をこわごわのぞくーに見られるように、権力の情態をかなり徹底してかり

この尺に対するゆきかけ中立化を計らぬは、  
ぬらぬい。さらに不当逮捕に対する地評の  
無関心、眩場へのじろまきに対する既成左  
翼からの妨害など課題がのこされた。

### 三里塚統一

獲得している。戸村氏はこの事を「農民が  
変ったのではない。今迄口家の農業政策、  
教育政策をはじめとする鎖で、がんじがら  
めにしばられていた農民が本来の姿に解き  
放たれたのだ。」という言葉で何處々何處々  
強調されていた。

三里塚における斗争が「将来も農業をや  
って行く、行ける」農民の自然発生的な土地  
斗争に始まったのに対して「農業ではやっ  
て行けない、又、そのままで加り置てらぬる  
生命にゐる淡路島(農斥の大部分)におい  
て土地権闘争の自然発生的なみに頼ること

### 一おわりに

我々は、今回の大長征に於て我々の地域斗  
争論を具體的に行つてきた。その中で我々は  
その理論が十分に風日的な普遍性を帯びた  
という確信を得た。そして各地に於て我々と  
同じような向題意識を以て斗争を開始する  
いは開始せんとする節分が米比多数とはいえ  
ないばかりも存在することを発見した。一方  
6・14の東京集会の風日風共闘、風日反成に  
結果した多数の学生、労働者、市民が明確な  
方針を打ち出す、又その巨大なエネルギーを  
十分に指導しうる運動の存在しないことも残  
念ばかり事象である。そのようは状況を我々  
は、地域斗争の風日的展開とそれの結核、又  
それらを軸としつつ風日風共闘、風日反成を  
ソウと十の再編を通じて切り拓くことを大胆  
に提議したい。本日(6・20)の公闘斗争シンポ  
ジウムは、闘士、労働者現地地を呼んでいり節  
分と我々の結核をほひかと共に風日的な地域

ほびきないし、また個々の部落は山間部に  
孤立して物理的に連帯が困難なを強  
られている。又、淡路において教育、漁  
業、市民生活等々様々な領域において資本  
主義体制の重圧が根強く公然に住民の意識  
に影を落としていく。我々としてそれは  
全領域に渡る政治的反抗の行動と(戦)闘が要  
求されている事を意味する。これは三里塚  
においても萌芽的に現れ始めているわけであ  
るが、70年代の地域斗争に於ては全面的な  
要求されるものであろう。

我々は地域における拠点の形成を通じて  
全面的な政治を展開し、地域住民の政治性  
革命性の開花を勝ちとらねばならぬ事を  
確認できるのである。

斗争組織の結核の端緒としての学内的な連  
絡組織、連合体の結核への一つの足がかり  
として重要は意味を帯びている。又、我々  
はその参加者の多くが自らの手で地域斗争  
と組織これんことを訴えたい。最後に我々  
は、そのようは風日的な結核の軸として理  
論的の発行と風日的な地域斗争を描いてい  
る節分による会合を今夏計画していることを  
報告しておく。

### 〈スローガン〉

- 地域斗争を全面展開し
- 大規模な解体の場とせよ。
- 根拠地―遊撃地を結核し
- 地区ソビエト統一戦線へ。



「パルチザン」臨時特別号

'70・6・20 発行

京大凌路斗争委員会

075-771-8111 内 4536